



約束の平安

今村 郁子

シンガポールでは、クリスマスも半袖でおいします。シヨーウインドーには、日本と同じようにサンタクロースやツリーが飾られ、街路樹もまばゆいばかりにデコレーションされて、街行く人々もゆつくり楽しみます。

父の転勤先シンガポールにある日本人教会で「イエス様を私の罪からの救い主として信じます」と告白したのは、中学一年生の時でした。私はとりわけ何かひどいことをしているわけではないけれど、人には言えない妬みや怒り、憎しみがある。それが私と神様を遠ざける罪だと知りました。この罪を私に代わってイエス様が負い、赦し、そのうえ私と共にいて下さると知った時、本当に嬉しく思えました。天井には大きな扇風機が回り、蚊取線香の匂いの中、クリスマスにキリスト生誕劇や賛美をしたのが楽しい思い出です。

帰国後、大学生になってからは、聖書の教えより友達やボーイフレンドと遊ぶほうが楽しくなり、教会から遠ざかっていました。社会人になって仕事が軌道に乗り始めた矢先、母が末期癌で入院しました。その闘病生活の中、十数年ぶりに仕事でシンガポールに数カ月滞在したのです。でも私の心の中はいつも母のことを思い、不安や恐れで覆われています。そんな時にふと日本人教会を思い出して、

記憶を頼りに行ってみると、天井の扇風機も蚊取線香も、そこにある安らぎも、何もかも昔のままでした。「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。」(ヨハネ一四・二七)ずっと探し求めていた心の安らぎは、イエス様の中にあることに気づきました。

私は神様を忘れ、神様に背を向け、自分勝手に歩きました。でも神様は私を忘れず、私を見捨てませんでした。私の失敗も痛みも受けとめ、かえってキリストにある平安と恵みに変えると約束して下さいました。

それから数年経った今、その約束が私の想像をはるかに超えて一つ一つ実現していくのを、驚きと喜びをもって体験しています。



初めてのクリスマス

佐藤 敦子

クリスマスと言えば、中学二年の時の私家で開かれたクリスマス集会と祝会が、五十年たった今でも忘れることができません。

その年の夏、町の公民館で二晩続きの伝道集会が開かれ、宣伝カーの声に誘われるままに行ったのがそもその始まりでした。当時、町には教会がありませんでした。一日目、「神は愛です」という話、そしてすてきな歌。今まで私の知らなかった世界がある、また聞き

たい。次の晩も出かけたのです。私は物事にあまり熱中するタイプではないのに、集会の終わりには求めに応じて自分の住所を書いたり、なぜか積極的になっていました。

秋に入り集会の案内が届き、毎週夜の家庭集会に出席。牧師先生は遠くから来られるように、集まる人は大人ばかり数人。外国人の先生も時々見え、聖書を持っていない私に英語の新約聖書を下さいました。集会では口マ書を学びました。何を話されたのか覚えていません。それでも次の週の箇所を辞書をひいて下読みして行きました。私が毎週、夜出かけるので母から声がかかり、私が「聖書の話聞きに行っている。イエス様の話をしていて良い話だから、お母さんも聞いてみたら」と逆に誘うと、母はついてきました。次の週も毎週ずっと。そして十二月、その家で集会ができなくなり、自宅住まいの私の家で続けられることになりました。

「聖しこの夜：」と親子でクリスマスの賛美をするすばらしさ。神様は不思議な導きを通して、この喜びを与えて下さったのです。母が、私の姉や妹たちが、そして父がイエス様の救いの喜びにあずかりました。その初めが家庭集会、そしてクリスマス会。あのクリスマスの夜、確かにイエス様は私の家の戸をたたき、中にお入り下さって、家族一人一人に神様の祝福と喜びを贈って下さったのです。すばらしい救い主、主イエス様をほめたたえます。ハレルヤ！(ルカの福音書一章一節)